

Glocal Tenri

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.26 No.5 May 2025

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University



5

CONTENTS

- ・ 巻頭言
天理教の用語
／井上 昭洋 1
- ・ 天理教の異文化伝道と「文化」の「翻訳」
(17)
ヨーロッパにおける天理教の伝道の諸相⑥
／加藤 匡人 2
- ・ 台湾の社会と文化—天理教伝道史と災害民族誌 (25)
山名大教会の台湾伝道復興と加藤勇
／山西 弘朗 3
- ・ イスラームから見た世界 (34)
イスラームの信仰を支えるモノやツール①
／澤井 真 4
- ・ 日本占領期の香港—植民地研究の視点から— (3)
日本による植民地統治の原型：台湾の位置づけ
／山本 和行 5
- ・ 天理参考館から (38)
万国博覧会とは その1
／幡鎌 真理 6
- ・ ブラジルの宗教的風景 (5)
アメリカ南部人移民の植民地経験②
／中西 光一 7
- ・ おやさと研究所ニュース 8
2025 年度公開教学講座のご案内

巻頭言

天理教の用語

おやさと研究所長 井上昭洋 Akihiro Inoue

天理教には様々な教理用語がある。天理教独自の用語もあれば、他宗教から拝借してきた用語、独自の用語ではあるが想像が付きやすいか、説明を受ければすぐに分かるものなど、幾つかのグループに分けることができるかもしれない。ところで、現在、私は「身上」に「お手入れ」をいただいて入院している。未信者であっても「身上にお手入れをいただく」とはどういうことか、その文脈から、私が「身体に異常をきたして」入院したと予想できるだろう。「身上」＝身体、「お手入れ＋謙譲語」＝上位の存在から手を入れること、と理解することができると思う。盆栽に手を入れて整えるように、身体に親神が手を入れることが「お手入れ」であると解することができる、更にこの教理用語の理解に近づく。

しかし、本来手を入れるということは、その対象物をより良い状態にするためになされる行為であるはずなのに、対象物（人間の身体）を悪い状態（病氣や怪我）にするような行為を「お手入れ」と呼ぶのはなぜなのか？そのようなことをする親神の意図はどこにあるのか？と未信者の人であれば疑問に思うはずだ。天理教の信者であれば、そのような質問にはすぐに答えることができるし、その説明は単なる用語の説明を超えて教理の解釈に入ってくるので、ここでは割愛する。

さて、最初に天理教の用語は幾つかのグループに分けることができると述べた。その中に、日常用語に教理的な意味を持たせて（意味をずらして）使われる用語がある。例えば、「たんのう」という用語。日常用語としては、熟達していることを指すこともあるが、第一義的には満足すること、十分に満ち足りた状態を意味し、「おいしい料理を堪能する」というように使われる。教理用語としての「たんのう」も同様に十分に満ち足りることを意味するが、用いられる文脈が日常用語の「堪能」と異なるため、ややもすると本来の意味から

外れたニュアンスを帯びて使われがちだ。例えば、身上にお手入れをいただいて心を倒している人に「辛いだろうが、たんのうさせてもらいなさいね」と励ます状況は、信者であれば容易に想像できるだろうし、また実際にそのように論された経験のある人もいるだろう。本来、堪能は放っておいても自然にできるものである。誰でも美味しい料理を食べれば、上質の芸術作品を観れば、堪能できちゃうのだ。しかし、天理教では、美味しくもなければ上質でもないものを味わうような状況で「たんのう」という用語が用いられるので、我慢や辛抱といった意味を帯びてしまい、それが本来の意味に取って代わってしまうことさえある。

同様に、本来の意味を見失いがちな教理用語に「出直し」がある。この単語は一般的に、一度引き返して改めてやり直すこと、最初から新しく始めることを意味する。「顔を洗って出直す」という表現を乱暴に投げつけられた人もいるだろう。一方、天理教では死ぬことを意味する。キリスト教なら召天、仏教なら成仏と、宗教によって死を意味する単語はさまざまであり、それはまたその宗教が持つ死生観を表している。天理教の場合、知り合いの人が亡くなれば「〇〇さんが出直された」と言うのだが、あまりにも頻繁に使われるので、「出直し」は日常用語の「亡くなる」とほぼ同義に受け取られ、天理教の死生観が詰まった大切な用語であることを忘れがちだ。

随分と昔のことだが、友人の研究者に天理教では死ぬことを何と言うのか？と尋ねられたことがある。私が「出直し」と答え、その教理的な説明をしようと構えていると、遮るように「天理教ってすごいねえ。死ぬことを出直すって言うんだ」と言い、ニヤリと笑みを浮かべて「僕も早く出直したいよ」と呟いたのだ。彼のウィットに富んだ返しに、「出直し」という用語をぞんざいに使ってしまい、がちな自分を反省した次第である。

ヨーロッパにおける天理教の伝道の諸相⑥

フランスにおける日本語教育機関数と学習者数の推移

前回(2025年3月号)では、天理日仏文化協会の活動の芯である天理日本語学校について、その設立のねらいと社会的背景を概観した。その中で、フランスにおける日本文化や日本語学習への関心の高まりについても触れたが、とくに日本語学習への関心は今後紹介する内容にも関わるので、今回からその大まかな傾向を見ていきたい。

筆者が確認した限りでは、海外の日本語教育に関する資料は1967年から公開されており、1975年以降は主に国際交流基金(1972年に外務省所管の特殊法人として設立、2003年に独立行政法人化)が中心となって調査の実施ならびに報告書の公開をしている。これらの公開された資料をもとに、1967年から近年までの推移をまとめたのが、以下の「フランスの日本語教育機関数」(表1)と「フランスの日本語学習者数」(表2)である。表では、フランス全体の数字に加えて、学校教育以外の数字も記載しているが、これは天理日本語学校がそのカテゴリーに含まれるからである。

では、まずはフランス全体の日本語教育機関数と学習者数を見てみよう。表を見た限りでは、教育機関数も学習者数も概ね右肩上がりになっており、とくに1980年前後から1990年前後にかけては増加率が高いことが窺える。天理日仏文化協会長を務めていた岩切耕一は、この年代に顕著な出来事として、日本のバブル経済とフランスにおける日本語教育の広がりを指摘している(岩切 2007: 12)。実際にフランスの日本語教育については、1970年代半ばから高校卒業試験のバカロレアに日本語が第1、第2、第3外国語として選択できるようになり、また1980年代には中等教育で、1990年代には初等教育でも日本語教育が始まっている(国際交流基金 2023b: 9-10)。尚、2006年から2009年の間には機関数が29カ所減っているが、これは統合や閉鎖に陥った機関があったことや、調査に対して無回答だった機関の割合が高かったことが理由とされ、日本語学習自体に対する関心は維持されているとされる(国際交流基金 2011: 85)。

一方で、学校教育以外の日本語教育機関数と学習者数はまっすぐに右肩上がりしておらず、年代によって上下が見られる。機関数は、1990年代前半には大きな伸びはなく、1998年前後

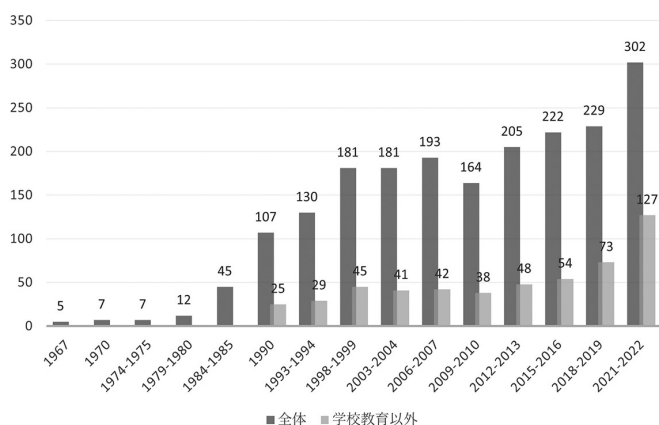


表1. フランスの日本語教育機関数(出典: 国際学友会 1967、国際交流基金 1975、1981、1987、2005、2008、2011、2013、2017、2020、2023a、国際交流基金日本語国際センター 1992、1995、2000、出版文化国際交流会 1970。2015年度、2018年度、2021年度については、国際交流基金ホームページ上に掲載の集計表も参照。)

に一度大きく増え、その後2009年前後にかけて緩やかに減少した後、2012年頃からまた増加傾向に移っている。また、学習者数についても上下が見られ、とくに1990年代には大きな増減が見られる。これは日本側ではバブル崩壊による政治的不安定化に加えて、阪神淡路大震災や地下鉄サリン事件が起こり、またフランス側では90年代に不景気となり、さらに1996年のフランス核実験によって日仏関係が冷え込んだことが関係しているとされる(岩切 2007: 12)。

[引用文献]

*紙幅の都合で、日本語教育機関関連の資料は副題を省略し、編者と出版社が同一のものは統合した。

岩切耕一(2007)「出向帰本報告—天理日仏文化協会での勤務を終えて(4)—文化協会の会員について」『天理教海外部報』第511号、p. 12。

国際学友会編(1967)『海外における日本語教育機関一覧(大洋州・ヨーロッパ州・アメリカ州編)』国際学友会。

国際交流基金「海外日本語教育機関調査」<https://www.jpff.go.jp/j/project/japanese/survey/result/>(2025年3月31日閲覧)

国際交流基金編(1975、1981)『海外日本語教育機関一覧』国際交流基金。

国際交流基金編(1987)『海外日本語教育機関一覧』凡人社。

国際交流基金編(2005、2008、2011、2017、2020、2023a)『海外の日本語教育の現状』国際交流基金。

国際交流基金編(2013)『海外の日本語教育の現状』くろしお出版。

国際交流基金編(2023b)「日本語教育国・地域別情報—フランス(2023年度)」<https://www.jpff.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/2023/france.pdf>(2025年3月31日閲覧)

国際交流基金日本語国際センター編(1992)『海外の日本語教育の現状』大蔵省印刷局。

国際交流基金日本語国際センター編(1995、2000)『海外の日本語教育の現状』国際交流基金日本語国際センター。

出版文化国際交流会編(1970)『世界の日本語教育機関一覧』出版文化国際交流会。

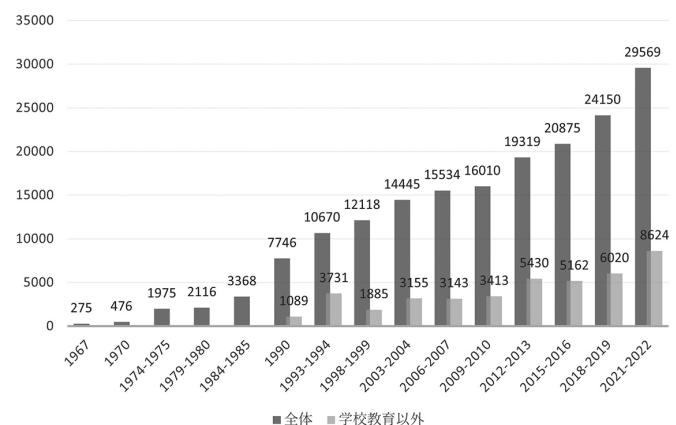


表2. フランスの日本語学習者数(出典は表1と同じ)

山名大教会の台湾伝道復興と加藤勇

山名大教会の台湾伝道復興

前回(3月号)では、戦後初めて短期滞在で渡台した日本人布教師・加藤勇(のちの嘉義東門教会3代会長)について紹介した。加藤勇が渡台したのは、教祖70年祭を控えた1953(昭和28)年であった。1967(昭和42)年に三濱善朗8代庁長が布教ビザを取得し、戦後初めて庁長として渡台を果たす14年も前のことだった。筆者は、近年公開された中華民国(台湾)政府の公文書デジタルアーカイブの中から自ら発見した史料に基づき、嘉義東門教会につながる現地信者たちが加藤勇を何とか招聘しようと台湾省政府民政庁長宛に陳情書を提出したことを明らかにし、日本と台湾双方で加藤の渡台実現のために尽力したことを述べた。

では、なぜ戦前台湾に39カ所あった教会の中で、嘉義東門教会の加藤勇の渡台はこんなにも早い時期に実現したのだろうか。それは、嘉義東門教会が布教対象を本島人(現地人)としていたこと、そして教会開設は1913(大正2)年と早く、終戦までの32年間にわたって現地信者を丹精する中で社会的エリート層にも信者を広げていったことが理由として考えられる。実際に陳情書を作成した教会関係者の弁護士・黄宗焜はのちに、立法委員や嘉義県知事を務めた。さらに、三濱庁長が渡台後に住居および台湾伝道庁仮事務所を探すことに尽力したのは、山名台北佈道所の理事長(理事長)の陳居住とこの黄宗焜であった。2人は、伝道庁の財団法人である「中国天理教総会」を設立するために、すでに財団法人として台北市政府から認可を受けていた山名台北佈道所の理事長および董事(理事)全員をそのまま「中国天理教総会」の董事も務めてもらうことにして、中央政府の内政部から認可を受けることになった。(天理教台湾伝道史編集委員会、88-89頁)。このように伝道庁復興において山名大教会および加藤勇は大きな役割を果たしたと言える。

異文化伝道において加藤勇の果たした役割

加藤勇の略歴は次のとおりである(加藤・1968、86頁)。1919(大正8)年6月25日、台湾生まれ。台湾に育ち1938(昭和13)年2月天理中学校卒業。予習科を修了して天理教教師に補命され、爾来教会にて教務に従事した。台湾語は台湾人と同様堪能で、役員信者および布教所の仕込みに専念した。太平洋戦争終了と共に台湾は中華民国に返還されたため、会長加藤鍋吉と共に山名大教会に引き揚げた。その後も内地布教の傍ら、機会ある度ごとに台湾に渡航し、役員信者の指導に当たった。2代会長の出直し後、1965(昭和40)年11月27日に3代会長に任命された。

特に、彼自身が「台湾語は台湾人と同様堪能にて役員信者および布教所の仕込みに専念した」と記述している点が重要である。当時、台湾は日本の統治下であったため天理教は基本的に日本語で書かれた教理書に基づいて日本語で教えが説かれていた。日本統治が始まって日本語による教育を受けた世代や、その後天理中学へ内地留学した現地人を除いて、日本語がスムーズに理解できる本島人はきわめて少数であった。現在の台湾における中国語(台湾華語)は、当然のことながら戦後の中華民国によって普及したものであり、当時現地の人々が生活言語として使用していたのは台湾語(閩南語)であった。しかし、台湾語は発音も難しく、文法も中国語と異なる部分もあり、統一

した表記法も整えられていなかった。

そこで重要になったのが日本語と台湾語に長けた人材であり、この言葉と基底にある文化・習俗の違いが本島人布教の大きな障壁として立ちだかったのである。金子圭助は、著書の中で嘉義東門教会初代会長・加藤きんと孫の3代会長・加藤勇との関係について次のように書いている。「きんは自分のできなかった夢を孫の勇に託した。台湾伝道の荒道開拓者とするため、勇の幼児期より台湾人信者の家に預けた。台湾婦人の乳を飲ませ、台湾人の生活を送らせ、台湾人同様に育てた。中学校だけは、おぢばの天理中学校へ入れた。勇はきんの期待にこたえ、台湾語(閩南語)に精通し、何ひとつ不自由はしない。風俗習慣にも精通している。台湾伝道の先導者として道の上に活躍し、嘉義東門教会につながる信者たちに兄か親のように慕われている」(金子、149～150頁)。さらに、加藤きんのいんねんの自覚については、次のように述べている。「家は代々男子後継者が育たなかったといういんねんである。きんの祖父の代以前から養子のいんねんで、父も養子、きんの夫弥市郎も養子のような立場、娘まさの夫鍋吉は養子、分かっているだけでも四代養子が続き、五代目に嗣子勇が生まれた。きんは勇の出生を非常に喜び、やっといんねんが切れたようだとやった」(同上、146頁)。また、営林署の務めをなかなか辞めない鍋吉(のちの2代会長)がようやく辞めて、別科に入ることを決意した時に、きんは「鍋さん、嘉義東門という教会はなも、台湾の人を専門にお救けする教会として許されたところで、世界だすけを信条となさる教祖の思召の上から、まんだ遅々とした歩みじゃけれど、現地人布教をしている教会は思召に叶った教会やと思うりますきに、その教会を継いで、子々孫々末代まで本島人のおたすけに励んでおくれやす」と頼んだという(同上、121頁)。

加藤勇は自らの幼少期を振り返り、「私は祖母の遺志を継いで厳格な両親に見守られ、台湾人社会で育てられた。子供のころから台湾の三字経、論語、民間信仰者の信奉される神々の降筆による聖經を聞かされたので現代には通じないカチへのドタマと成っているようだ」(加藤・1969、24頁)と述べている。さらに、「台湾と私」という寄稿を依頼されて当惑してしまったと胸の内を吐露しながら、自身のアイデンティティについて、「仮面の私と本当の私と言う人間像なるものになるのではないか。仮面の私とは日本での私であり、本当の私とは台湾に於ける私となる訳である」と述べている(同上)。加藤勇は、まさに加藤きんの本島人布教という遺志を引き継ぐため、台湾人となり、天理教が台湾という異文化伝道の中で、日本と台湾双方を言葉と文化を深く理解し、二重のアイデンティティを持った橋渡し役として、台湾信者から兄や親のように慕われ、戦後は中華民国の統治下となった台湾で伝道復興のために大きな役割を担ったのである。

[参考文献]

- 加藤勇(1968)「台湾の道(四) 嘉義東門教会(山名)」『フォルモサ』4号、59～86頁。
加藤勇(1969)「七度生れ変っても台湾伝道を」『フォルモサ』6号、24～26頁。
金子圭助(1983)『炎の女伝道者 加藤きん』天理教道友社。
天理教台湾伝道史編集委員会(2025)『天理教台湾伝道史』。

イスラームの信仰を支えるモノやツール①

天理大学人文学部准教授

澤井 真 Makoto Sawai

紙かオンラインか

3月26日の天理教教会本部の月次祭後、知人の教会長から拙稿についての感想を頂戴した。その方は、本誌『グローバル天理』を紙媒体で読んでいるようだが、読者の多くはおやさと研究所のウェブサイトアクセスして、お読みいただけることをご存知だろう。筆者はウェブサイトで読むというよりも、過去に自分が書いた内容を確認するために、ウェブサイト版『グローバル天理』にアクセスしている。一方で、紙媒体というモノがもつ利点もある。自分が読み終わった後は誰かに渡しやすいし、気になった記事は取りおくこともできる。

近年、天理教の三原典についても、ウェブサイトやスマートフォンのアプリケーションで参照できる状況にある。もちろん、論文などで引用する際には紙媒体の「おふでさき」や「おさしづ」で最終確認を行うが、とっさに確認したい場合や、検索したい語彙を調べる場合には非常に便利である。一方で、紙媒体から成る天理教教義及史料集成部編『おふでさき索引』（1928年）は異なった表記が網羅的に掲載されているため、自分が検索した語彙しか出てこないアプリケーションによる検索よりも精度は高い。双方に利点があるため、それらを上手に使いこなすことで新たな知見を得ることも多い。

情報技術を用いて人文学研究の新たな地平を拓こうとする分野は、「デジタル・ヒューマニティーズ」と呼ばれている。膨大なテキストデータであっても、それらをデータとして打ち込んでしまえば一括検索も可能であるし、複数にまたがるテキストを横断しながら研究を行うことが可能となる。事実、インターネット上では著作権が切れた書物が公開されていて自由に閲覧することができるようになったし、音声データがインターネット上に公開されている。また、さまざまなソフトの普及により、それまでは図示が難しかった系譜や知的ネットワークを立体的に描くことができるようになった。

急速に普及するAIにテキストデータを学習させて、AIに答えを導かせようという動きもある。京都大学の熊谷誠慈らの研究チームが開発した「ブッダボット」は、仏教の経典を学習させることで、質問者の悩みに回答する対話型AIである。AIの能力はまだ未知数であるが、能力の向上が目覚ましい。人間には経典の記憶には言語的にも限界があり、さまざまな解釈まで網羅的に覚えていることはできない。その一方で、日進月歩で学習するAIによる回答は、いずれ僧侶による回答を上回るのではないかと指摘されている。AIを脅威に感じる僧侶は少なからず存在するだろうが、AIでは肩代わりできない側面があることも事実であろう。

イスラーム研究では、現地へ行って取得してきた写本などが少しずつオンライン化されることで、インターネット上で取得することができるようになってきている。そのため、少しずつではあるが、イギリスやトルコへ出向かなくとも、オンライン上でデジタル資料を手に入れることができつつある。

信仰の学びで用いられるアプリケーション

イスラームにおける伝統的な信仰の学びは、家庭での教育に加えて、モスクでウラマー（知識人）の説教を聞いたり、クルアーン学校へ通ったりするなかで培われてきた。しかしながら、

そうした学びの場が近くにあるとは限らない。郊外に住むために通うのが難しいという場合もあれば、自分が住む地域にはムスリムのコミュニティがないという場合もある。また、月謝が高く、子どもを通わせることが難しいという場合もあるだろう。

しかしながら、インターネットが普及し、スマートフォンやパソコンを通して多くの情報にアクセスが可能になった結果、学びの方法が変わりつつある。たとえば、Tarteel AI Quranというアプリケーションは、スマートフォンが備えている録音機能を使いながら、AIによるアラビア語の発音矯正を受けることができる。同様の仕組みは、スマートフォンを用いた英語学習など多言語にもあり、日本でもテレビCMが頻繁に行われている。このアプリケーションでは、単に誤った箇所が示されるだけではない。クルアーンに関する解釈が数多く掲載されているため、何段にもわたる本棚で埋め尽くされてしまうクルアーン注釈書（タフスィール）はもはや不要となる。それだけではなく、知りたい情報にすぐアクセスすることができるという利点がある。

さらに、My Quranというオンラインサイトでは、対話型のAIを用いてイスラームについて学ぶことができる。たとえば、「イスラームとはなにか」と英語で質問を入力すると、「本当にアッラーの御許の教えは、イスラームである。啓典を授けられた人びとが、知識が下った後に相争うのは、ただ彼らのあいだの妬みからである。アッラーの印を拒否する者があれば、アッラーは本当に清算に迅速であられる。」（クルアーン3章19節）という一節のアラビア語と英語訳がすぐに表示される。さらに、利用者はこの一節の解説をまとめられた状態で読むことができる。このオンラインサイトは無料で利用できるが、結果的に自らの信仰を深めたい者だけではなく、イスラームという宗教を知りたい者たちも活用することが可能である。

イスラームには、聖典クルアーンに関わって多くの議論や解釈の蓄積がある。理解の仕方が1つではない以上、これまでにどのような解釈がなされてきたかを知ることが、信仰の言葉をより豊かにするうえで重要であるはずである。AIによる相談や学びで得られるものが全てではないとは言え、情報をめぐる今日の状況は、従来とは大きく異なっている。慎重であることは決して悪いことではないが、結果的に情報発信という点では他に後れを取ってしまう可能性も否めない。新聞やラジオ、テレビなどは、これまで人々に情報を運んできたメディアであった。今、私たちはこれらのいずれよりも巨大なメディアが信仰生活のあり方を変えていく様を目撃しているのである。

[参考文献・ウェブサイト]

天理教教義及史料集成部編『おふでさき索引』天理教教義及史料集成部、1928年。

My Quran「<https://www.myquran.online/>」（2025年4月7日アクセス）



Tarteel AI Quranのアプリケーション

日本による植民地統治の原型：台湾の位置づけ

天理大学国際学部教授
山本 和行 Kazuyuki Yamamoto

1905年2月、いわゆる「六三法」の3度目の延長に向けた議論がおこなわれていた衆議院の「明治二十九年法律六十三号ノ有効期間ニ関スル法律案」委員会の席上、内閣総理大臣の桂太郎は、台湾を「日本本土ト同様ナル領土」とするか、もしくは「殖民地トシテ唯土人ヲ満足サセ、若クハ土匪ヲ殲滅シテ往ク」のかという委員の質問に答えて、「無論殖民地デアリマス内地同様ニハ往カスト考ヘマス」と述べ、政府委員として会議に出席していた台湾総督府民政局長の後藤新平に詳しい説明を任せた。後藤新平はこれを受けて、「民政費ハ全然台湾ノ収入ヲ以テ弁ズルト云フコトニナルデアリマス」と答え、植民地経済の自立と向上を念頭に置きながら、「財政的独立」について言及している。

桂太郎の答弁を受けて、委員のひとり「此台湾ハ、帝国ノ殖民地ト云フコトヲ、現内閣総理大臣ノ明言セラレター言ハ、吾々議員トシテ実ニゾツスルデハゴザイマセヌカ」と述べている。なぜなら、日清戦争以降の台湾の「戦後経営」をめぐる議論のなかで、「台湾ヲ殖民地ニスルト云フコトハ、何レノ内閣カラモ承ツタコトハナイ」⁽¹⁾からであった。前回の論考で触れたとおり、台湾の位置づけをめぐる政府および台湾総督府の答弁は一貫して曖昧なままに推移していたのであり、台湾領有から10年が経とうとしていたこの時期に至って、台湾を「無論殖民地デアリマス」と内閣総理大臣が明言したことは、出席委員たちに一定の衝撃を与える出来事であった。

この時期に台湾が「殖民地」であると明言されるに至った背景には、日清戦争後に進められた台湾経営の推移が大きく関係している。とりわけ、この委員会で政府委員として出席していた後藤新平が台湾総督府民政局長・民政長官の職に就いていた1898年から1906年までの台湾における統治事業の展開は、台湾を植民地として定位するのに十分な統治実績を積み上げていた。

台湾在職中の後藤新平が主導したおもな統治事業は、以下の⁽²⁾ようにまとめられている。

総督府官僚制度の改革、治安の確保（乃木総督時代の「三段警備」の廃止と「土匪」（抗日武装勢力）に対する「招降策」の実施）、ペスト・コレラ・マラリア等に対する衛生・医療事業（…）台湾銀行の設立、台湾事業公債20年計画による縦貫鉄道の建設、基隆築港、土地調査事業、阿片・樟脳・食塩の専売事業の確立、台湾製糖の設立による製糖事業の展開、米作、ウーロン茶の市場開拓等が挙げられる。教育分野では、国語教育と医学教育に重点が置かれ、台湾人向けの公学校、総督府師範学校・医学校が整備された。なかでも、台湾旧慣調査は台湾の社会・人文科学的な総合調査として後世の学術的遺産となった。

こうした統治事業の展開のうえに、冒頭に触れた1905年の後藤新平の答弁にあったような「財政的独立」（ここでは「国庫補助金の辞退」を意味する）が果たされることになった。この「財政的独立」に象徴される政治・経済・社会・文化的な諸制度上の「独立」は、台湾を「内地」日本の諸制度から切り離して統治することを既成事実化していくものであり、それは台湾を植民地として位置づける発想のもとに果たされたものであった。

そもそも、後藤新平は台湾総督府着任当初、自らを登用し同時期に台湾総督に就任した児玉源太郎に対し、「凡そ総督の職務なるものは帝国の植民政策の基礎を確立せねばならぬ（…）乃ち総理大臣を始め、内閣員及び内地政治家の頭脳を開拓することが、何よりも緊要なる先決問題である」と進言したと回想している⁽³⁾。日本政府の台湾統治方針が曖昧だった当時の状況のなかで、後藤は明確に「帝国の植民政策の基礎を確立」しなければならぬと考え、そうした考えを政府内に浸透・確立させていかなければならぬと考えていた。上述したような後藤が主導した統治事業の内容は、台湾の環境や在来文化のありかたに基づいたものが多く見られ、在地の人々への「配慮」がうかがえるものであるが、こうした「配慮」のうえに立つことこそが日本の植民地統治の確立に不可欠だと考えられていたことが、以下の文章から看取できる。⁽⁴⁾

簡約して言へば、苟くも殖民地を統治する者は、我誠を土着民の胸中に措くこと能はざれば其成功は出来ない。此要件を果さんとするには、先づ物的・心的の両方面に亘りて民を知らねばならぬ、民衆の心理状態を悉にせねばならぬ、之が先決問題である。此意義を会得して始めて、殖民地統治の政策の基礎を樹て得るのである。

「台湾を法制度上の異域」として位置づけた「六三法」は、1906年にはほぼ同内容で期限を5年とした「三一法」が制定されたが、本論考で見てきたような台湾の統治実績と合わせて考えれば、ここから台湾は明確に植民地として位置づけられていく。同時にそれは、日本の植民地統治が徐々にその内実を獲得・確立していくプロセスでもあった。

おりしも、日本は1905年に日露戦争において「薄氷の勝利」を得てサハリン（樺太半島）南半分の領有権、および朝鮮（大韓帝国）に対する排他的支配権を獲得（いわゆる保護国化）し、1910年には朝鮮併合を実現する。さらなる「新領土」の獲得に際して、日本政府は朝鮮併合にともない朝鮮総督府を設置し、翌年には「朝鮮ニ施行スヘキ法令ニ関スル法律」を制定した。「六三法」や「三一法」と同内容の法律が定められ、総督による独裁的な統治体制を速やかに構築しようとする日本政府のこうした動きは、台湾統治の実績を前例に、これを既成のものとしてさらなる「新領土」へと適用していくことによって、その植民地統治体制を確たるものにしていくものであったと捉えることができるだろう。

[註]

- (1) 以上、衆議院委員会での発言は、外務省条約局法規課『台湾ニ施行スヘキ法令ニ関スル法律（六三法、三一法、及び法三号）の議事録「外地法制誌」第三部附属』（1966年）、192頁、194頁、195頁、および209頁。
- (2) 春山明哲・松田康博・松金公正・川上桃子編『台湾の歴史大全—基礎から研究へのレファレンス—』（藤原書店、2025年）、123頁。
- (3) 後藤新平『日本植民政略一斑』（拓殖新報社、1921年）、第四の1頁。
- (4) 同上書、第四の4頁。

万国博覧会とは その1

天理参考館学芸員
幡鎌 真理 Mari Hatakama

「くるぞ、万博。」ミャクミャクが右手を挙げてポーズをとる姿を大阪近辺で目にした方も多いだろう。そう、2025年日本国際博覧会（以下、公式略称の「大阪・関西万博」と称す）の宣伝ポスターである。この文章を書いているのは開会式1週間前なので「くるぞ、」だが、4月13日におそらく夢洲で盛大な開会式が挙行され、これを読んでいたところは絶賛開催中であろう。筆者は1970年の大阪万博（正式名称は「日本万国博覧会」）を体験しているので、あの爆発的なエネルギーが55年後にどんな化学変化を起こして再び現れるのか期待が高まっている。

冒頭に、大阪万博に関する個人的な思いを記しておきたい。1970年当時、筆者は大阪市内の小学1年生だった。担任が熱心な美術の教員で、お祭り広場でおこなわれた絵画大会（だったと思う）に参加し、クラスが一丸となって所定の時間内に天神祭の絵を描ききった。残念ながら賞は獲得できなかったが、“子どもらしいダイナミックな絵”というような意味のお褒めの言葉を主催者からいただき、メダルを首に下げてもらって大層ご満悦だったことを覚えている。そのとき、担任がお祭り広場にそびえ立つ太陽の塔を指差し、あれは素晴らしい芸術家がつくったものなのだと、繰り返し熱く私たちに語った。おそらく岡本太郎に心酔していたのだろう。確かに大きくて、威圧的（に当時は見えた）で、奇妙な造形物に、子どもながら強い印象を受けた。その後の会期中に、遠足や家族旅行とで5回ほど出向き、いろいろなパビリオンを巡った。サンヨー館の人間洗濯機や日立グループ館のシミュレーター、せんい館の四谷シモン作の人形など、近未来の先進的な科学技術や不思議な前衛芸術に目を奪われたのは確かだが、一番刺激的だったのは、7歳で初めて対峙した“世界”だったと思う。あのとき世界各国の文化に触れることで、私は多くを学んだ。もしかしたら、10数年を経た後、世界の生活文化資料を収蔵する天理参考館に勤務することになる「未来」へとつながったのは、このときなのかもしれない。日本人が海外に出かけることが決して普通ではなかった時代に、世界の方から会場にやってくる、エキサイティングで啓蒙的なイベントだった。およそ人文社会科学系の研究を志し、なかでも学芸員資格を取得するために必修の博物館概論の講義を受けた人であれば、博覧会は避けて通れない。博覧会と博物館は、同じ人が見せる二面性のように、切り離せないものなのだ。学芸員の視点から、大阪・関西万博開催に関連して、博覧会について数回に分けて紹介したい。なお、博覧会には外国の国々を招致して開催する万国博覧会と、国内の諸機関で完結する内国博覧会の2種類あるが、本稿では主に万国博覧会（以下、万博と称す）について述べることにする。



図1 日本万国博覧会会場図 昭和45年

大阪万博にまつわる個人的なエピソードを書き連ねたが、55年前の万博を知っている世代と知らない世代で、今回の大阪・関西万博に対する思いが二極化している。「2025

トで検索すると、オープン1週間前でもなお“2025大阪・関西万博中止”というカテゴリが出てくるのが悲しい。開催に否定的な人びとにとって、万博は“オワコン”らしい。「あんな多額の予算を使うのはムダ」という意見は、1851年に世界で最初に開催された第1回ロンドン万博のときから出ていた。このときの万博の正式名称は「万国の産業の成果の大博覧会」である。アテネで近代オリンピック



図2 日本万国博覧会入場券と券袋 昭和45年(図1・2とも天理参考館蔵品)

が産声を上げたのが1896年、サッカーワールドカップの第1回ウルグアイ大会の開催が1930年なので、万博はこれらよりも実に半世紀も先行していた。ちなみに、万博は国際博覧会条約に調印した「国家」でなければ開催も参加もできない。この条約の実務を担う機関が博覧会国際事務局（BIE:the Bureau International des Expositions）で、1928年に創設され、本部は現在もフランスのパリに置かれている。奇妙なのは、BIEは第一次世界大戦後に当時の国際連盟の下に設置されたがために、今は存在しない国際連盟の下部組織としてそのまま位置づけられていることだ。そして国際連合とは関わっていない。ともかく、万博を開くためにはBIEの承認、すなわち国際社会の同意が必要で、一国の事情や思惑で勝手に開催することはできない。ゆえに「経費が予想より高いのでやっぱり開催を中止します」とか「パビリオンの完成が遅れているので開催を1週間遅らせませう」などという申し出は通らないし、国際社会に対して恥をかくことになってしまう。BIEに開催申請できるのも、他国に参加招請できるのも「国家」のみで、万博はすべて外交ルートを通じておこなわれる大変“重い”イベントなのだ。国際オリンピック委員会（IOC）も国際サッカー連盟（FIFA）も大変著名ではあるが非政府機関であり、委員が政府を代表しているわけではない。さらにいえばオリンピックは「都市」のイベントだが、万博は「国家」のイベントである。都市の名称を冠した“大阪・関西万博”（“は筆者）は略称であり、「2025年“日本”国際博覧会」（“は筆者）があくまでも正式名たるゆえんだ。先述の国際博覧会条約の第一条「定義」には「博覧会とは、名称のいかんを問わず、公衆の教育を主たる目的とする催しであって、文明の必要とするものに応ずるために人類が利用することのできる手段又は人類の活動の一若しくは二以上の部門において達成された進歩若しくはそれらの部門における将来の展望を示すものをいう」とある。万博は“公衆の教育”がミッションであり、基軸となるのは“達成された進歩”と“将来の展望”、すなわち「未来」であると表明している。2025年に大阪・関西万博で日本国はどのような「未来」を描ききることができるのか、期待したい。

アメリカ南部人移民の植民地経験②

おやさと研究所講師
中西 光一 Mitsukazu Nakanishi

フランク・マクマランの植民地：旅のつづき

ニューヨークからリオデジャネイロへの船旅は1カ月かかり、その間、嵐に見舞われることなく、南部人たちは無事にブラジルへたどり着くことができた。彼らはリオデジャネイロのホテルに数日間滞在したのち、最後の船旅に乗り出し、1867年6月にヴァーレ・ド・リベイラ地方のジュキアに到着した。こうして、マクマランに率いられた南部人のブラジル移住は前回記したように紆余曲折を経て実現したが、その後、さらなる不幸が彼らを襲うことになるのである。

植民地活動が始動した直後の9月29日、マクマランは持病により命を落としてしまう。その結果、後継者争いが勃発し、植民地内では同胞間の対立や折衝が相次ぎ、しばしば同床異夢の状況が生じた。この争いは、1865年にマクマランとともにブラジルを調査したウィリアム・ボウエンと、マクマランのおじであるジェームズ・ダイアーの間で繰り広げられ、数カ月間にわたって続いた。しかし、ほとんどの南部人がボウエンの側についたため、最終的に彼が植民地の実権を握ることとなった。こうして南部人たちは気持ちを整理し、植民地活動を再開させた。一方、ダイアーとその家族は、ステイブ・ワッソンという人物と行動を共にし、やむなく別の地域へ移住した。

ところが、その後の植民地は長くは続かなかった。その理由として、次の点が挙げられる。1つは、前回のブラード・ダンの事例と同様に、農業の失敗が原因であった。すなわち、ジュキアの土地は生産性が低く、農業に適していなかったのである。もう1つは、南部人はホスト社会に溶け込まず、ブラジル人に対して非妥協的で、時には抑圧的な姿勢を示していた。彼らの多くは白人至上主義者であり、異人種間の混淆が進んだブラジル社会に嫌悪感を抱き、現地社会に適応することができなかった。

この点について“人種”に注目し、南部人の人種観を考察したルシアナ・ブリトによれば、彼らは白人と黒人の混血が進んだブラジル社会において、多数の「ムラート（mulato）」（白人と黒人の混血）が社会的・政治的地位を享受していたことに衝撃を受けたと指摘している。つまり、ブラジル人は黒人に対して寛容であり、異人種間混淆への抵抗感を持っていなかった。そのようなブラジルの社会文化的性格は、白人至上主義を信奉する南部人にとって強烈なカルチャーショックとなり、混血に対する恐怖心を一層強めるとともに、彼らの植民地活動への意欲を失わせる結果となったのである。この人種に関する問題については、改めて別の回で詳しく論じることとする。

ジェームズ・ガストンのシリリッカ植民地

シリリッカ植民地（以下、シリリッカと略す）は、サウス・カロライナ州出身の医師ジェームズ・ガストンによって、1867年6月にジュキアから南西へ約50キロメートルの場所に築かれた。植民者の数はわずか7人であり、ダン（150人）とマクマラン（140人）の植民地と比較すると、きわめて少人数であった。しかし、シリリッカの南部人たちは現地の市場経

済のなかで巧みに活動し、ブラジル人との人的ネットワークを構築しながら、ホスト社会に溶け込んでいった。

シリリッカには2つの土地が存在していた。1つは、借地としてフルウッドという人物に付与されたものであり、もう1つは、別の南部人であるビュフォードの管理下にあった。これらの土地は、いずれもポルト（シリリッカ港）の周辺に位置していたと考えられており、南部人たちはその地でトウモロコシ、エンドウマメ、生姜、乾物、ベーコン、マテの茶葉、タバコなどの換金作物を生産し、イグアペの市場へ出荷して収益を得ていた。シリリッカにとって、イグアペは経済活動の中心地であり、当時のブラジル人商人の多くも、“市内唯一の交通路”であったリベイラ・デ・イグアペ川を利用して、各地で生産された農畜産物のほとんどをイグアペへと出荷していた。

シリリッカの商談に直接コミットしていたのは、リーダーであるガストンであった。彼は、当地の食品価格の変動や物流管理にも精通していたため、近隣の町ファシーナで医療に従事する傍ら、商談も行っていた。そして、それに関する情報や具体的な用件を手紙に記し、シリリッカの南部人たちに送っていた。また、彼らは奴隷の売買にも関与していた。実際、マクマランおよびダンの植民地に関する文献には奴隷に関する記述は見られないが、シリリッカにおいては、デュランという人物が黒人奴隷を所有していたことが確認されており、ガストンやビュフォードも奴隷売買の取引に関与していた。

このように、シリリッカの南部人たちが奴隷の売買に従事していたという事実は、彼らが新天地ブラジルにおいても、アメリカ南部の戦前的な価値観—すなわち白人至上主義—に染まっていたことを示している。奴隷の売買は、まさにそのような彼らの心情を端的に表していたと言える。

こうして、これまでのシリリッカの様子を概観すると、一見、ホスト社会において成功を収めたかのように見える。しかし、やがてシリリッカは衰退の一途をたどることとなる。その具体的な理由については、菅見の限りでは、商業活動における何らかの戦略的失敗に伴い、南部人たちがガストンに反旗を翻したことによって、植民地内部に亀裂が生じたことが主因であったと考えられる。植民地の解体後、フルウッドやビュフォードらは、サンパウロ州サンタバーバラ・ド・オエステ市にあるノリス植民地へ移住したとされ、デュランはサン・シマンという町に移った。一方、ガストンはヴァーレ・ド・リベイラ地方への愛着からファシーナに留まり、医師としての職を続けたが、十分な利益を得ることはできなかった。最終的に彼はその地に見切りをつけ、家族とともにカンピーナスという別の町へ移ったのである。

[参考文献]

Luciana da Cruz Brito. *Impressões norte-americanas sobre escravidão, abolição e relações raciais no Brasil escravista*. Tese (Doutorado em História Social) – Faculdade de Filosofia, Letras e Ciências Humanas, Universidade de São Paulo, São Paulo, 2014.
William Clark Griggs. *The Elusive Eden: Frank McMullan's Confederate Colony in Brazil*. Austin: University of Texas Press, 1987.

2025
年度

おやさと研究所公開教学講座 「元の理」の学術的研究と その新しい展開を求めて

【開催趣旨】

2025年に天理大学は創立100周年を迎え、また2026年には天理教が教祖140年祭を迎えます。この記念すべき旬に、おやさと研究所では「元の理」をテーマに公開教学講座を開催いたします。

「元の理」が持つ救済の真理を掘り下げ、現代人の心に届くように論じることが、教内の人々を“たすけ”へと勇ませ、また教えの普遍的な“ひろめ”に寄与することです。

今回、各研究員はそれぞれの専門分野を踏まえつつ、また自らの学問領域を越境して、「元の理」について研究を深め、その成果を広く学内外・教内外に問うことになりました。2025年4月から2026年3月まで全12回のシリーズとして行い、第12回は2025年度の「教学と現代」として開催いたします。

開催内容

【日時】 毎月25日 13:00～15:00

【会場】 天理大学研究棟3階 第1会議室

※但し、第10回（1月）、第11回（2月）はふるさと会館大ホール

回	日程	テーマ	担当者
第1回	04月25日（金）	「元の理」研究入門	金子昭 研究員
第2回	05月25日（日）	「元の理」の人種理論・平等思想	中西光一 研究員
第3回	06月25日（水）	「元の理」の社会思想	澤井治郎 研究員
第4回	07月25日（金）	「元の理」と布教伝道	尾上貴行 研究員
第5回	08月25日（月）	「元の理」と福祉思想	八木三郎 元研究員
第6回	09月25日（木）	「元の理」の見立て・象徴論	澤井真 研究員
第7回	10月25日（土）	「元の理」と天理教学	島田勝巳 研究員
第8回	11月25日（火）	「元の理」と「こふき」	岡田正彦 研究員
第9回	12月25日（木）	「元の理」と異文化理解	森洋明 研究員
第10回	01月25日（日）	「元の理」の人間学／人類学	井上昭洋 所長
第11回	02月25日（水）	「元の理」のジェンダー論	堀内みどり 主任
第12回 （教学と現代）	03月25日（水）	「元の理」の学際的研究の可能性	佐藤孝則 元研究員、他

※事前申し込みは不要です。直接会場にお越しください。

グローバル天理

第26巻 第5号（通巻305号）

2025年（令和7年）5月1日発行

発行者 井上昭洋

編集発行 天理大学 おやさと研究所

〒632-8510 奈良県天理市杣之内町1050

TEL 0743-63-9080

FAX 0743-63-7255

URL <https://www.tenri-u.ac.jp/oyaken/index.html>

E-mail oyaken@sta.tenri-u.ac.jp

おやさと研究所（HP）



印刷 天理時報社

Printed in Japan